

選挙、それは幸せになるための一歩

児湯支会代表 猪上 千凜

選挙と聞いて、皆さんはどう思うでしょうか。「難しい」、「面倒くさい」など、堅苦しいイメージがあるのではないのでしょうか。非常に分かります。なぜなら、私自身も同じ思いだったからです。

私が初めて選挙に参加したのは十八歳の時、公職選挙法の改正で選挙権年齢が十八歳に引き下げられた年でした。冒頭にも申したとおり、「難しい」、「面倒くさい」この思いの中で両親に連れられ、選挙会場に向かいました。しかしそこで目にしたのは、私と同年代の方が記載台に立つや否や、投票用紙にスラスラと立候補者の名前を書き始めた後姿でした。その一方で、私は誰に投票すれば良いか分からない、そもそも立候補者を知りませんでした。その時、急に罪悪感に駆られたと同時に、日頃から新聞やニュースを通して少しでも選挙に関心を持っておけばよかったと悔しさと情けなさでいっぱいでした。社会人となった今改めて振り返ると、若者の選挙への意識の違いがああの場面で明確になること、それから、選挙に行く前に立候補者それぞれの政策等を吟味した上で投票していれば、自分の意思が少しでも反映されて、生活にもたらす良い影響があったのではないかとつくづく痛感しています。

近年、日本の若者の投票率は世界全体でみても低い現状にあります。そうした中で、公職選挙法改正により選挙権年齢が十八歳に引き下げられたのはなぜでしょうか。その背景には、少子高齢化が進む現在、未来の日本を生きていく若い世代に、日本のあり方を決める政治に関与してもらいたいという意図があると思います。

では、多くの若者が抱く「難しい」、「面倒くさい」という思い、「投票したって意味がない」という無力感を払拭するべく、いかに政治を身近に感じ、選挙に導くためにはどうすれば良いか。その大部分を解決できる方法が、教育にあると私は考えます。

今の学校では、政治や社会の仕組みを授業の中で勉強することはあっても、現実的な政策課題や選挙の争点などについて、自分事として捉えて具体的に討論する機会が少ないのではないのでしょうか。私は選挙自体に関心を持ってもらうためには、座学で知識を習得するだけでなく、実際に経験して自分事として捉えることも必要ではないかと考えます。例えば、模擬選挙を実施する学校が最近増えています。川南町内の学校では、好きな給食のメニューをお題として、実際の選挙と同じ形で投票する模擬選挙を実施しています。さらに、どの学校でも実施されている生徒会選挙は身近な選挙です。授業だけで扱うのではなく、そのような活動に若者が参加することで当事者意識を持ってもらうことが必要であり、将来にかかわる大変素晴らしい経験になると私は思います。

今の若者の方々にお伝えしたいことがあります。何不自由のない生活を送りたい、生きやすい社会であってほしいなど、望んでいることがたくさんあるのではないのでしょうか。まずは選挙に行ってみましょう。候補者の中には、自分が望む社会をつくってくれる人がいるかもしれない、さらには若い世代が投票に行って投票率を上げることによって、この社会を何か変えられるかもしれない、選挙にはたくさんの可能性が秘められていると思います。

たかが一票されど一票。自分の一票に誇りを持ちましょう。その一票を投じることが、自

分の思い描く幸せになるための大切な一歩となる、私はそう信じています。

若者だけでなく、国民総出で選挙には意味があることを世の中に発信していきましょう。
そうすることで、明るい未来が切り開かれることを心から願うばかりです。